

鼬の話（四話）      = = =      三州横山話より

### ノシ餅を運ぶ鼬

鼬が正月の切餅を自分の巣へ運ぶ時は、スーというような声を盛んに立てると言います。それは鼬が嬉しくて立てるのだと言う人もありました。早川安太郎という男が、夕方畑の道を歩いていると、行く手から白い布のようなものが地を這って来るので、足元へ近づいてから、不意に怒鳴ると、そこから鼬が飛び出して逃げて行ったと言います。白い布のように見えたのは、伸餅であったようです。鼬が自分の体で餅を冠って持って来たのだらうと言いました。鼬は餅に限らず何でも自分が見つけただけは、全部巣へ運んでしまっただけで最後に尻をかけておくと言います。



### 鼬の鳴声

鼬の鳴声で吉凶を占う風習があって、一声鳴きは凶事の前兆と言います。また鼬が行く手を横切ったときは、行先に凶事がある故、三步後に退って呪文を唱えて行くものと言います。

イタチ道チ道チカ道ガイ道、ワガユク先ハアララギノ里    と三度唱えて行く。

### カマイタチ

カマイタチは旋風に乗って横行し、人の生き血を吸うと言います。また飯綱(\*1)ともいって、昔飯綱師が弟子に伝授の時、封じ方を伝えなかったため横行して悪者になったと言います。別の説では、飯綱師ではなく、尾張鍛冶とも言います。

### 鼬の最後尻

鼬の尻は最後の断末魔に出すと言って、これに当てられたが最後、犬でも顔

色が変わると言いますが、ある男が厩の傍で鼬を撲ったら屁を出して、そのため馬が三日ばかりは飼葉を喰べなかったと言います。

私が子供の頃、鼬捕りの箱で鼬を捕ったとき、中にごとごとともがいている奴を、そのまま池の中へ沈めて殺したことがありましたが、後で引き出したときはさらににおいはなかったようでした。

八名郡大野町の生田福三郎という人の噺に、若い頃、鼬寄せをしたときに寄った鼬は東京の両国橋の下で生まれたと言ったようですが、そのおり鼬の乗り移っているという男が、水を所望するので、茶碗に入れて与えると、恰も鼬が水を飲む格好をして飲んだそうです。残りの水を後でその生田という人が飲もうとすると、その水が鼬の最後屁と少しも違わぬ匂いがしたそうです。よく視ると、茶碗の縁が黄色く染まっていたそうです。居合わせた数人のものに嗅がして見たそうですが、誰しも辟易とせぬものはなかったと言いました。

(\*1) 飯綱(いづな)は、飯縄とか伊豆那とも書かれる。

人間に憑くといわれる妖獣で、狐憑き(狐の霊につかれること)の1種。体長9~12cmくらいの鼬のような小動物。毛は柔らかく、尾は箒のようで尾先がふっくらとしている。

4本の脚が互い違いに並んでおり、指は5本、手と耳は人間に似ている。民間宗教家のような特殊な人間の命令で動くもので、憑きものとしては犬神やくだ狐ほど一般的ではないという。人間にとり憑いた場合、その人は狂ったように何かを口走り、やたらと大食いになるが、水に溺れさせると飯綱は逃げるとされる。お金に憑くと勝手に増えるともいう。

飯綱の正体はコエゾイタチであるらしい。

飯綱を使役することができ、使役するものを飯綱使い、操る方法を飯綱の術といい、山伏や呪術師が利用していた。